『ニーベルンゲンの歌』における triuwe

―クリエムヒルトの宝の要求に関する写本 B・C の相違を手がかりに―

松原　文

序　クリエムヒルトのハゲネに対する宝の要求»Hortforderung«

『ニーベルンゲンの歌』には、あるべきと思われる情報が書かれず、また論理的な整合性が崩れているように見える箇所が多数ある。その中でも作品の構造に直接関わり、その軸を揺るがすようなとりわけ大きな不整合が、最後に登場する。夫シーフリトを殺したハゲネに対して復讐を目指して来たクリエムヒルトが、最終場面で捕縛されたハゲネを目の前にしながら彼を即座に殺そうとはせず、まず宝の要求»Hortforderung«を行う場面である。先ず、写本 B[1]のテクストに従って当場面に至るまでの叙事詩の筋を概観する。

ブルゴンド王グンテルとプリュンヒルトの結婚がシーフリトの協力によって成立した事が公となり、シーフリトが富と武力、そして名誉においていよいよブルゴンドの宮廷を脅かす存在となったとき、重臣ハゲネはシーフリトを殺害する。ハゲネは、寡婦となったクリエムヒルトがニーベルンゲンの宝»Hort«を利用して夫のために復讐する事を危惧し、彼女から宝を奪い取る。シーフリトに変わらぬ誠実の心»triuwe«を抱き続けるクリエムヒルトは、彼を殺害した者に復讐するため、富と武力を持つフンの王エッツェルに嫁す。七年後、彼女が復讐を胸にブルゴンド族を饗宴に招待すると、ハゲネはその心を見通し、危険から身を守るため招待には応じぬように、と王グンテルの説得を試みる。だがグンテルはかつてクリエムヒルトと成した和解の誓い»suone«を拠り所にこの進言を拒否する。また二人の王弟は、勇気ある者が我々と共に行くのを止めるな、と暗にハゲネを臆病者だと嘲る。剛勇の士ハゲネはここで郎党随一の武勇の誉れに懸けて招待に応じることとする。ハゲネはフンへの旅の場面において、ブルゴンド勢の「守り手」と描写される。

ハゲネによるエッツェルとクリエムヒルトの息子の殺害を契機に、フンの宮廷は途方もない殺戮の場となり、ブルゴンド勢はハゲネとグンテルを除く全員が殺される。また大勢のフン族、逗留していた異国の騎士達も殺される。辺境伯リュエデゲールは主君への忠誠»triuwe«と、道を案内し歓待し親族の誼までも結んだブルゴンドへの親愛の情»triuwe«の板挟みになって絶望し、娘婿ギーゼルヘルと刺し違えて死ぬ。

---

[1] 以下、写本 B（1250 年頃 St.galler Handschrift）については Bartsch, Karl (Ausgabe) / de Boor, Helmut (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 22. Auflage.Wiesbaden 1996. に従う。写本 C（1230 年頃 Donaueschinger Handschrift）については Hennig, Ursula (Hrsg.): Das Nibelungenlied: nach der Handschrift C. Tübingen 1977. に従って引用する。

ハゲネが捕縛され復讐が完遂されるべき瞬間、クリエムヒルトはすぐに彼を殺そうとはしない。彼女はまず、かつてハゲネに奪われたニーベルンゲンの宝の返還を要求し、返還すれば生きてブルゴンドに返すという可能性を示す。そしてグンテルの存命中は誓いに縛られ宝の在処を言えない、とハゲネに返還を拒否されると、和解»suone«したはずの肉親グンテルを迷うことなく先ず殺害する。そしてハゲネに宝を返す意志が無かったことを確認した時、ようやく彼の首を落とすのだ。

1. 伝承の結合と変成

『ニーベルンゲンの歌』は 13 世紀初頭（1190～1205）、パッサウ近郊において我々がその名を知らない詩人によって現存写本に見られるような形へとおおまかなところ形作られる。そしてほぼ同時か僅かに遅れて成立する[2]『哀歌』と共にその周辺地域で筆写されたと推測されている。様々な伝承[3]から素材を得ている叙事詩だが、筋の大きな流れは 5・6 世紀に生まれた二つの伝承、シーフリトーブリュンヒルト伝説[4]とブルゴンドの没落伝説[5]に由来する。そしてそれら古い素材の上に、ヴォルムスとフンの宮廷や人々の振る舞い（宮廷・騎士の作法やキリスト教の信仰など）の描写などを通して当時の宮廷社会の姿が映し出されている。

---

2 Lienert, Elisabeth (Hrsg.): Die Nibelungenklage. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Bartsch. Einführung, neuhochdeutsche Übersetzung und Kommentar von Elisabeth Lienert. Paderborn 2000. S. 15.

3 ワルタリウスサガ、ディートリヒ伝説など。

4 古ノルド語の『古エッダ』の「シグルズの歌」（9 世紀）や『ヴェルスンガサガ』（1250 年から 1260 年頃に成立し、1400 年頃にアイスランドで筆写された。）などに見る事が出来る。『古エッダ』は、9 世紀から 13 世紀にかけてノルウェーとアイスランドで形成された伝承が 1270 頃に Codex Regius『王の写本』として写本化されたもの。ここに収められた歌謡 29 編は、古代ゲルマンの神話や英雄伝承を伝える。谷口幸男訳『エッダ―古代北欧歌謡集』（新潮社 1973）。同著『エッダとサガ：北欧古典への案内』（新潮社 1976）。

5 9 世紀から 10 世紀頃に成立した『古エッダ』の「アトリの歌」などに残る。あらすじ：フンの王アッティラは、妻グードルーンの兄弟、ニブルング族のグンナルと弟ヘグニが所有する宝を欲望し、饗宴を催して奪おうとする。ヘグニらは妹の警告を理解しグンナルに出立を諫めるが、王は敢えて死地に向かう。フンの国でグンナルは縛り上げられ、アトリに「黄金で命をあがなうつもりはないか」と黄金を要求される。グンナルは弟の生きている間は言えない、と隠し所の告白を拒否。そして弟の心臓を要求する。ヘグニの心臓を見せられた時グンナルは言う。「わしら二人が生きている間疑念が去ることはなかったが、わしだけが生き残った今、それも晴れた。ライン河よ、神の末裔たるニブルング族の遺宝、争いのもとなる黄金をおさめよ。異国の宝環はフン族の公達の手に輝くよりは、流れやまぬ河の底に輝く方が良かろうぞ。（28 節）」蛇牢に投げ込まれたグンナルは、竪琴をかき鳴らしながら死ぬ。兄弟のための復讐を図るグードルーンは、夫に二人の息子の肉を偽って食べさせ、フン族は王子の死に狂乱に陥る。グードルーンは酒に正気を失った夫を臥所で刺し殺し、宝庫を開き宮殿に火を放つ。前掲書、175~180 頁。

二つの伝説がいつ頃どのように結合したかという問題は、19 世紀から長く重要な研究課題であった。だが、『ニーベルンゲンの歌』より古い時期に伝承を筆写した作品はなく[6]、精密で確かな情報は非常に限られているため、問題は未だ解明されていない。ただし、『古エッダ』や同時期の散文の『ヴォルスンガサガ』などの作品から 10 世紀以前の伝承状況について多少推測することは出来る（ただ、これらが筆写されたのは『ニーベルンゲンの歌』より新しく、13 世紀後半以降である)。『古エッダ』の『シグルズの歌・断片』[7]からは、すでに 9 世紀に二つの伝説が結びつけられていた可能性がうかがえる。[8]

> ライン川の南でシグルズは殺害された。樹の上の鴉が声高く叫んだ、「アトリがあなた方の刃を赤く染めるだろう。偽りの誓いが戦にはやる者を滅ぼすだろう。」[9]

なぜ、アトリ[10]がシグルズの復讐の担い手となりうるのか。その詳しい筋の経緯は『古エッダ』の中には全く謡われていない。

時代を下った『ニーベルンゲンの歌』の成立期、すなわち 12 世紀の二つの伝承の結合の状況については、同じくアイスランドで筆写された『ティードレクスサガ』[11]がもう一つの例を伝えている。これは 12 世紀に大陸（主にゾーストなど低地ドイツあるいはライン地方[12]）からスカンジナビア半島に渡ったハンザ商人によって伝承が広められ、1250 年頃に

---

[6] 9・10 世紀頃から、北西ヨーロッパの石彫りレリーフなどに図像として確認される。Heinzle, Joachim: Zum literarischen Status des *Nibelungenliedes.* In: Christoph Fasbender (Hrsg.): Nibelungenlied und Nibelungenklage. (Neue Wege der Forschung) Darmstadt 2005. S. 106-121. Hier: S. 108.

[7] 九世紀初期。写本に欠落があり、冒頭と末尾が欠損。『ニーベルンゲンの歌』とは異なり、「シグルズの短い歌」や「グズルーンの歌」と同じくブリュンヒルトはアトリの妹となっている。

[8] Dinkelacker, Wolfgang: Nibelungendichtung außerhalb des „Nibelungenliedes“. Zum Verstehen aus der Tradition. In: Ja mus ich sunder riuwe sin. Festschrift für karl Stackmann zum 15. Februar 1990. Göttingen 1990. S. 83-96. Hier: S. 90.

[9] 谷口、150 頁。

[10]『古エッダ』中の作品ではブリュンヒルドの兄ともされている。

[11] ハンザ商人によってノルウェーへ伝えられ、大陸との関係強化を図るホーコン 4 世（1217~63）の時代、1250 年頃に筆写された。エッダにあったような神話的側面はない。『ニーベルンゲンの歌』とは非常に細かい描写での一致も見られるが、現在は、大陸の伝承の単なる引き写しではなく、ノルウェーの地の詩人によって独自の創作が加えられただろうとする理解が有力である。Heinzle, Joachim: Einführung in die mittelhochdeutsche Dietrichepik. Berlin 1999. S. 38-41.; Reichert, Hermann: Die Nibelungensage im mittelalterlichen Skandinavien. In: Heinzle, Joachim/ Klein, Klaus/ Obhof, Ute (Hrsg.): Die Nibelungen: Sage, Epos, Mythos. Wiesbaden 2003. S.29-89. Hier: S.62.ff.; Fine Erichsen(Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule: altnordische Dichtung und Prosa.; Reihe 2.; Bd.22). Jena 1924.; 野内清香、石川栄作：ティードレクスサガにおける英雄ジグルトの物語、徳島大学言語文化研究 12 (2005), 29~63 頁。；同：ティードレクスサガにおけるグリームヒルトの復讐、徳島大学言語文化研究 13(2005), 19~58 頁。；山崎陽子：翻訳『シズレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説 I・II・III・IV、目白大学人文学部紀要 言語文化篇 5,6,7,8 (1999, 2000, 2001, 2002)。

[12] Ehrismann, Otfrid: Nibelungenlied. Epoche-Werk-Wirkung. München 2002 (2. Aufl.) S. 36.

筆写されたものである。

『ニーベルンゲンの歌』と比較すると、作品の後半の宝にかかわるエピソードに関して相違点がある。エッツェルが黄金欲と無縁であったのに対し、『ティードレクスサガ』のアッティラは（『アトリの歌』のアトリと同様）強い黄金欲を持ち、当初は妻に劣らず妻の兄弟が有する宝を欲していた。ただ、この黄金欲のモチーフは途中で消し去られ、彼はグンナルらとの友好関係を望む王となる。そして最後には惨劇を引き起こした妻を非難し殺させる。またグリームヒルトにおいても、黄金欲のモチーフは途中で表から姿を消し、宝の要求は（『ニーベルンゲンの歌』とは異なり）二度繰り返される事はなく、戦いの最初の場面に一度登場するだけである。伝統的な黄金欲のモチーフは『ティードレクスサガ』においてもまだ一貫した論理を持つ筋の中に組み込まれておらず、宝の要求場面には二つの伝承の継ぎ目を観察することが出来る。

作品の前半部分の二組の結婚（シーフリトークリエムヒルトと、グンテループリュンヒルト）に関しても、重要な相違点がある。『ニーベルンゲンの歌』では、プリュンヒルトは求婚者グンテルに対して三つの試合で彼女に勝たなければ命は取るという試練を課す。そして冒険を実際に行うのは隠れ蓑によって姿を隠したシーフリトであり、彼はこの奉仕によってクリエムヒルトとの結婚の許可をグンテルから得るのだ。これに対し、『ティードレクスサガ』では二つの求婚は緩やかな関係でただ並置されており、求婚の試練はない。ジグルトとグンテルの間の危険をはらんだ共存関係の描写は『ニーベルンゲンの歌』よりも素朴で単純なものとなっている。[13]

12 世紀以降のこれら二作品において、シーフリトの物語が目指すのはクリエムヒルトとの結婚である。だがそれは伝承の新しい形である。古い伝承段階ではシーフリトとプリュンヒルトの関わりがむしろ物語の中心的なエピソードであり、作品の枠をなしていた。『古エッダ』とほぼ同時期の伝承を伝える『ヴォルスンガサガ』[14]によれば、ブリュンヒルトは結婚を誓ったシグルズに裏切られた事から、彼に無実の罪を着せて夫に殺させ、自らもまた自害して果てる。後代の伝承ではこのブリュンヒルトの愛と復讐に代わって、クリエムヒルトのシーフリトへの愛と復讐にスポットライトが当たるようになったのだ。特に『ニーベルンゲンの歌』は、最初の歌章において乙女クリエムヒルトの生い立ちと彼女が見た鷹の夢が語られており、その後の筋を見ても彼女の結婚と愛が作品の軸である事は明らかだ。ブルゴンドの没落伝説と結合するに際して、シーフリトとクリエムヒルトの物語の描

---

[13] 『ティードレクスサガ』のジグルズもグンテルの結婚に最後の場面では尽力する。すなわち初夜にプリュンヒルトに縛り上げられてしまったグンテルに頼まれて、プリュンヒルトの処女を奪い、その怪力を減ぜさせた。なお、『ニーベルンゲンの歌』のシーフリトは彼女をグンテルに処女のまま引き渡す。

[14] 『古エッダ』と同時期の 10 世紀以前の伝承を伝える散文作品（筆写されたのは 1260 年頃）。谷口幸男訳 『アイスランド・サガ』（新潮社、1979）；菅原邦城訳 『ゲルマン北欧の英雄伝説―ヴォルスンガ・サガ』（東海大学出版会、1979 年）。

写は拡大され、これが作品全体の枠となったのである。

『ニーベルンゲンの歌』を伝える写本の数（現在、11 の完全写本、23 の断片が見つかっている）[15]を同時代の大規模な宮廷物語と比べると、それはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァル』（16 完全写本、70 近い断片、1477 年の印刷本 1 つ）[16]と『ヴィレハルム』（12 前後の完全写本、90 断片、1 抜粋）[17]にこそ劣るものの、例えばハルトマン・フォン・アウエの『イーウェイン』（15 完全写本、17 断片）[18]やゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタン』（11 完全写本、16 断片）[19]とほぼ同等である。ドイツ語文学が初めて大きな実りを結ぶこととなったこの時代、『ニーベルンゲンの歌』は最大級の反響を得ていたと言ってよいだろう。

ただ、12～13 世紀に筆写されたある一つの形を以て『ニーベルンゲンの歌』は完成し、変成を終えたのではなかった。語り手の裁量と語りの場の雰囲気に委ねられていた口承詩から、書写され固定された作品へと文芸の形態が推移していくこの時代、物語の筋や人物の言動には反復検証に耐えうる一貫した論理が求められるようになっていた。後述する通り、既に 13 世紀前半の写本 C 写本には、ある一貫した意図に沿った改変が存在する。論理的整合性を文学作品に求めようとするこの新しい感性の目から『ニーベルンゲンの歌』の最初の形（写本 B ヴァージョン）を見た時、二つの伝承は未だ整合的に融合されておらず、解決すべき問題や埋めるべき空白があったのだ。また、15 世紀の写本 m や 16 世紀の印刷本『不死身のザイフリート』には 13 世紀のものとはかなり異なる筋の展開が見られる。数世紀にわたる忘却の後、18 世紀後半に再発見されると、『ニーベルンゲンの歌』はヘッベルやワーグナーらにインスピレーションを与え、新しい作品が生み出されていく（19 世紀第 3 四半世紀）。それらはみな伝統的な素材を用いてはいるが、筋も構想も新しい独自の創作である。『ニーベルンゲンの歌』は、素材間にある力動性のために変成を繰り返し、新たな創作を生んでいったのである。

2. 嫁取り物語と『ニーベルンゲンの歌』

クリエムヒルトの人物像に沿って筋を辿ると、最後に彼女の復讐の意志が宝の要求に突

---

15 Müller, Jan-dirk: Das Nibelungenlied (Klassiker Lektüren). Berlin 2002. Hier: S.42.

16 Bumke, Joachim: Wolfram von Eschenbach (Sammlung Metzler) 8., völlig neu bearbeitete Auflage. Stuttgart 2004. S. 249.

17 ebd. S. 390.

18 Cormeau, Christoph und Störmer, Wilhelm: Hartmann von Aue. Epoche-Werk-Wirkung. 3., aktualisierte Auflage. München 2007. S. 19.

19 Huber, Christoph: Gottfried von Straßburg (Klassiker Lektüren). 2., verbesserte Auflage. Berlin 2001. S. 30.

然に取って代わられる事は大きな謎である。この問題は叙事詩の成り立ちに根ざすものである。

この時代の文芸作品は、アルトゥース物語でも英雄詩でも、定型の構造モデルに沿って語られる事がほとんどだった。そして詩人はゼロからオリジナルの創作を行うというよりは、定型から主要な人物像や筋の基本線、モチーフなどを得た上で、要素の追加や言葉の彫琢に技を凝らすのであった。文芸は、定型が要求するものと詩人の営みの間に生まれるものだったのだ。

構造の定型の代表的なものに、男が妻を得るまでの冒険が語られる「嫁取り物語」がある。『ニーベルンゲンの歌』はこの「嫁取り物語」と、そのヴァリエーション型が複数組み合わせられたものと理解することが出来る。

2.1.「破滅する異族間結婚物語」

まず『ニーベルンゲンの歌』の後編が扱うブルゴンドの没落伝説について考察する。『ニーベルンゲンの歌』以前にこの伝説を扱った『アトリの歌』では、求婚の冒険譚はほとんど語られず、物語は結婚後の場面から始まる。そしてアトリが妻の国が有する権力と富を欲望して饗宴を催すと欺いて義親族を招待し、殺戮する事が描かれる。なおこのような異族間の結婚を発端に発生する闘争と破滅が描かれる物語は、ほかにもいくつか存在する。[20]

この種の物語について、Walter Haug は、嫁を介した二族間の立場が逆転していることに注目して「逆転した嫁取り物語」[21]、Viktor Millet はこれをいわゆる「嫁取り物語」と区別して「破滅する異族間結婚物語」、と評価した。[22] そして Millet はこの「破滅する異族間結婚物語」という定型は政治的・軍事的闘争に絶えなかった実際の歴史を鮮やかに映し出す事が出来るものだ、と考察している。

当時の創作活動は独創を目指すのではなく定型モデルに従うものであった事を考えれば、個々のモチーフは、前後の文脈や人物造形との細かな関わりからだけではなく、定型の構

---

[20] 古英語の『ベーオウルフ』にも記述のある「フィンズブルフの戦い」、中世ウェールズで記された『マビノーギ』の一つ『スィールの娘ブランウェン』。ebd. passim.; Reichert, Hermann (ebd. 2003.) Hier : S. 82-83. ; 長埜盛訳『散文全訳ベーオウルフ・フィンネスブルグ争乱断章』(吾妻書房、1966年); 中野節子訳『マビノギオン 中世ウェールズ幻想物語集』(JULA 出版局、2000 年)

[21] Haug, Walter: Normatives Modell oder hermeneutisches Experiment: Überlegungen zu einer grundsätzlichen Revision des Heuslerschen Nibelungen-Modells. In: Strukturen als Schlüssel zur Welt: kleine Schriften zur Erzählliteratur des Mittelalters. Tübingen 1989. S. 308-325. Hier: S. 315.「嫁取り物語」に当てはまらない『アトリの歌』型の存在を指摘した。『アトリの歌』の型を invertierte Schema ないし Gegenparadigma と評した。

[22] Millet, Victor: Brautwerbung und gescheiterte Exogamie in der Burgondensage und in anderen europäischen Heldendichtungen. In: Alfred Ebenbauer/ Johannes Keller (hgg.): 8. Pöchlarner Heldenliedgespräch. Das Nibelungenlied und die Europäische Heldendichtung. (Philologica Germanica; 26), Wien 2006. S. 261-273.

造が要求しているものとしてより大きな構造や成り立ちから考察すべきである。Millet の考察するように「破滅する異族間結婚物語」の主題が部族闘争だとするなら、この定型の構造に沿って謡われた『アトリの歌』の場合、物語の主題は宝の要求»Hortforderung«というエピソードにおいて端的に、しかも鮮烈に表現されている、と言えるだろう。

2.2.「助け手による嫁取り物語」

『ニーベルンゲンの歌』には、その前編にも、プリュンヒルト伝説から素材を得て二つの嫁取り物語（シーフリトのクリエムヒルトに対する求婚・グンテルのプリュンヒルトに対する求婚）が置かれている。単身でヴォルムス宮廷に乗り込んで求婚するシーフリトに対し、グンテルはクリエムヒルトの保護者として結婚の可否を握っている自分の立場を利用して、シーフリトを自分のプリュンヒルトへの求婚の助け手[23]として用いる。このような助け手を用いる求婚は、いわゆる「嫁取り物語」が従うべき法則「最も強い男が最も美しい女を妻とする」[24]を冒すものであった。グンテルとシーフリトは法則と現実（最強の男は実は求婚者グンテルではなくその助け手シーフリトの方である）の乖離を隠すため、プリュンヒルトを隠れ蓑と演技によって欺く。プリュンヒルトは、結婚の祝宴の席で夫とシーフリトが同列の王として振る舞っている事に疑いを抱き、二組の結婚には崩壊の兆しが現れる。だが彼女は再び欺かれて宮廷の祝儀の体裁は保たれ、シーフリトはクリエムヒルトを伴ってネーデルラントに帰国する。こうして二つの求婚物語は共に成功し、一見平穏な終結を見る。

最高の王子シーフリトと最高の王女クリエムヒルトの紹介から始まった叙事詩は、ここで二人の結婚と繁栄の叙述で正統な「嫁取り物語」として幕を閉じたかに見える。そしてグンテルの「助け手による嫁取り物語」は崩壊の危機を内包しているのだが、宮廷的な華やかな所作の中で[25]、強引ながらも問題は一見解消されているかのように見える。だが悲劇を生むひずみはこの瞬間は爆発を免れても、構造上は未だ全く解決されていない。真実と見かけの不一致による悲劇という「助け手による嫁取り物語」のテーマは、プリュンヒルトの胸の内に保存されたまま、時は流れる。

---

[23] 求婚の助け手（Werbungshelfer）が登場するのは「嫁取り物語」のもう一つのヴァリエーションであり、この型の代表的なものにはトリスタン物語がある。この「助け手による嫁取り物語」という型では、嫁取り物語の「最強の男と最も美しい女」という法則を破りながらも求婚を成立させてしまう点にひずみが生じている。真実と見かけの不一致という悲劇が表現される型だと言えるだろう。

[24] Strohschneider, Peter: Einfache Regeln – komplexe Strukturen. Ein strukturanalytischesExperiment zum „Nibelungenlied“. In: Harms, Wolfgang/ Müller, Jan-Dirk (hgg.): Mediävistische Komparatistik. Festschrift für Franz Josef Worstbrock zum 60. Geburtstag. Stuttgart. Leipzig 1997. S. 43-75.

[25] Haug, Walter: Höfische Identität und heroische Tradition im Nibelungenlied. In: Strukturen als Schlüssel zur Welt: kleine Schriften zur Erzählliteratur des Mittelalters. Tübingen 1989. S. 293-307. Hier: S. 299ff.

十年後、プリュンヒルトは不正を暴いて名誉を回復し、自分こそ権力の最高位に立とうと願って饗宴を催し、両組は再びヴォルムスで見える。このヴォルムスへの招待は、まさに「破滅する異族間結婚物語」の始まりである。かつて、構造が要求していたにもかかわらず爆発が回避され宙吊りにされていた「助け手による嫁取り物語」の悲劇の芽は、ここで権力闘争をヴィヴィッドに表現する「破滅する異族間結婚物語」の型の登場によって、本来の展開を見せ始めるのだ。ひずみを内包するグンテルの結婚の真相は、プリュンヒルトとクリエムヒルトの口論の結果、公衆の面前で明らかにされる。グンテルとプリュンヒルトの結婚の継続、そしてこの二人を王と戴くブルゴンドの安寧のためには、最強の男シーフリトの存在はもはや許されないものとなる。

2.3. 三つの定型の混交

まず、前編の筋を支えた定型について整理すると、以下のようになる。①シーフリトを主人公とする「嫁取り物語」は、②グンテルを主人公とする「助け手による嫁取り物語」を内包する構造上一番外側の枠をなしている。だが②グンテルの結婚は構造上ひずみを抱えており、このひずみは③「破滅する異族間結婚物語」の形を借りる事で突破口を得る。この結果、シーフリトは殺され、①の「嫁取り物語」は他の物語の論理の犠牲となって挫折する。なお、これら三つの物語の定型の絡み合いに関して、その具体的な筋を主導的に推進したのはハゲネである。[26]

遺されたクリエムヒルトは「嫁取り物語」の法則に従って最高の男シーフリトと正当に結ばれた王妃であり、彼女は兄グンテルの求婚物語のひずみの犠牲者である。よって他の「破滅する異族間結婚物語」の女性達とは異なり[27]、彼女には惨劇の中で死ぬ理由も、また血族の元に戻って彼らと調和する理由もない。正統な「嫁取り物語」の主人公であるクリエムヒルトは、「破滅する異族間結婚物語」によって結婚を破壊された後も、殺された夫への貞節を守る寡婦となって生き続けるのだ。この夫への愛»triuwe«ゆえの復讐心は、グンテルとプリュンヒルトの結婚に関する第 1 のひずみが解消されようとする際に生まれた第 2 のひずみ、と言えるだろう。

こうして第 2 のひずみを解消すべく後編へと物語は継続され、クリエムヒルトはエッツェルの妻となる。ただし、物語を推進するのはクリエムヒルトのシーフリトへの愛»triuwe«と悲しみであり、「破滅する異族間結婚物語」の構造に定められている部族間の闘争というテーマはここには無い。エッツェルとの結婚もフン族とブルゴンド勢の殺戮も、筋の上では『アトリの歌』と一見殆ど同じように見えるが、『ニーベルンゲンの歌』の後編の主題は

[26] Haug (ebd.), Normatives Modell oder hermeneutisches Experiment. Hier: S. 323.
[27] 「フィンズブルフの戦い」で王妃は故国アイルランドに帰国。『アトリの歌』でグズルーンは宮殿に火を放って死ぬ。『ブランウェン』では王妃は故国への帰国の途上で死ぬ。

あくまでも夫シーフリトの殺害者に対する復讐であり、二作品の内実は全く異なる。だがそうであったにもかかわらず、最終の十詩節余り、殺戮の最後の局面に至ると、『ニーベルンゲンの歌』にも定型のテーマが凝縮された古いモチーフである宝の要求»Hortforderung«が現れるのだ。クリエムヒルトの夫への愛»triuwe«という動機は最後に突然捨てられたかのように見える。また、復讐されるべき邪悪な殺害者ハゲネには、『アトリの歌』のグンナルと同じ英雄の死が与えられたかに見える。

なぜ»triuwe«という独自のテーマを新しく持っていたはずの『ニーベルンゲンの歌』に、「破滅する異族間結婚物語」が持つ伝統的なテーマが戻ってくるのだろうか？

3.「宝の要求」というモチーフがもたらした不整合と解釈

「危険を知りながらあえて招待に応ずる英雄像」、「宝の要求」、「宝の要求を拒否するブルゴンドの英雄像」。『ニーベルンゲンの歌』の後編には、『アトリの歌』に謡われていたこれらのモチーフが見たところ殆どそのまま引き継がれているように見える。だが前述の通り、『ニーベルンゲンの歌』の後編の筋を推進しているのはクリエムヒルトの夫への愛»triuwe«であったのだから、伝統的な闘争のテーマを表現するモチーフは受け入れ難かったはずである。まずクリエムヒルト、ハゲネ、グンテルの三人の登場人物の言動を辿り、その後この問題に関して先行研究がどのような解釈を示してきたかを参照して、本論の立ち位置を考えたい。

3.1. クリエムヒルトとハゲネ　―鬼女と忠臣、あるいは triuwe な妻と傲慢な男か―

ブルゴンドの没落を計画し、宝を要求するのは、『ニーベルンゲンの歌』においてはアトリ（エッツェル）ではなくクリエムヒルトである。彼女は最終的にはハゲネを殺すものの、それは宝を返還して命を助かるか、殺されるか、という二択の要求に対してハゲネが前者を拒否した結果であり、本来目指されたはずの復讐の形ではない。このクリエムヒルトの行動の不可解さに論理を求めようとすると、さしあたり以下の二通りの見方があり得るだろう。まずクリエムヒルトとハゲネのやり取りを字義通りに捉える場合、彼女は自分がかつて所有した黄金への執着ゆえにハゲネにその返還を要求し、そのためにはかつて和解の誓い（»suone«）を結んだ肉親グンテルの殺害さえいとわない「鬼女»vâlandinne«」（B1748, B2371）となった、と読むことが出来る。一方、言葉の裏に象徴性を立ち上がらせてみると、「宝の要求」は貞節なクリエムヒルトの亡き夫への愛の表現、あるいはハゲネへの弾劾と見る事が出来る。

敢えて死地に赴いて最期には宝の要求を拒否し、一族の宝と名誉を守る英雄は、グンナル（グンテル）からハゲネへと移動し、両者の役回りは交換されている。ハゲネはここで、作品通して一詩節においてしか（B1140）語られていなかった[28]「王兄弟との誓い」を理由に、要求を拒絶する。この発言は主君への忠心ゆえの言動なのか。それともクリエムヒルトへの悪意から彼女を悪女に仕立て上げ、また同時に自らの死を美化しようと足掻いたものなのか。後者であればブルゴンド勢の「守り手」と評された家臣像は最終場面で大きく揺らぐ。また前者ならば、王兄弟とハゲネは共同してクリエムヒルトの不利益を策動していたこととなる。ここに、王兄弟の罪の有無の問題が新たに浮上する。

3.2. グンテル　―妹に対する罪の有無―

クリエムヒルトはハゲネの拒否の理由を知った時、グンテルの殺害を即座に命ずる。肉親であり、また和解の誓い»suone«を結んだにも関わらず、彼女は全く心を乱さない。また、グンテルの死に様には一詩節分も割り当てられず（B2369, 2[29]）、宝の秘密が守られる事に笑みを浮かべて死んだ『アトリの歌』のヘグニとは大きく様相が異なる。英雄の死を語る伝統的な描写方法が、グンテルには敢えて採用されなかったのだ。

グンテルはクリエムヒルトの招待に応ずる際、和解の誓いゆえに自分達の身は安全だと言う。また王弟二人も、クリエムヒルトとの親誼の有無や利益関係が問われる局面においては常に[30]、彼女の味方として振る舞い、敵視するハゲネを批判する。彼らのこれらの公的な発言だけに注目すれば、彼らには罪はなく、クリエムヒルトは最後和解の誓い»suone«を破る罪を犯し、ディートリヒが言うところの「鬼女」となってグンテルを殺害したという見方も成り立つだろう。だが、これらの公的な発言の裏に隠された細かい言動をクローズアップすると、様子は大分異なる。グンテルはハゲネの策に従い、まさにこの和解の誓いによってニーベルンゲンの宝をブルゴンドに得させたのであるし、「四人の誓い」において王兄弟はハゲネと歩みを揃え能動的に彼女の不利益を推し進めたのである。表だった敵対はせずとも、常に自分の利を求め妹の不利益となる行動をとったグンテルに英雄の死は相応しくなく、クリエムヒルトには兄を殺害する理由が十分に与えられているようにも思われる。

---

[28] 『ニーベルンゲンの歌』において初めて現れたモチーフである可能性が考えられる。『アトリの歌』では兄弟とされるグンテルとハゲネだが、『ニーベルンゲンの歌』では血縁関係はない。

[29] B2369, 1. "Ich bringez an ein ende, "sô sprach daz edel wîp.　2. dô hiez si ir bruoder nemen den lîp.　3. man sluoc im ab daz houbet; bi dem hâre si ez truoc　4. für den helt von Tronege. dô wart im leide genuoc. 1.「では決着をつけましょう」と高貴な王妃は答えた。2.そして兄の命を取ることを命じた。3.グンテルは首を落とされ、クリエムヒルトはその髪をつかんでそれを4.トロネゲの勇士の前に持ってきた。ハゲネの嘆きは非常なものであった。

[30] ハゲネが宝を略奪した際と、またクリエムヒルトの招待に応ずるか否かの議論の中で。

兄妹の和解の誓いと王兄弟四人による誓いという（『アトリの歌』にはなかった）二つの契約関係が前編に置かれたことによって、『ニーベルンゲンの歌』の宝の要求は単純な部族闘争の原理と異なり、結合価の高い複雑なものへと発展を遂げている。だがそれらを考察しても、クリエムヒルトの夫への愛»triuwe«という新しい主題と、宝の要求という古い主題の復活の関係はまだ説明出来ない。先行研究はどのような解釈を行ってきたのだろうか。

3.3. これまでの解釈と今後の方向性

Jan-Dirk Müller は、口承文学には自由、多義性が許され、書かれる物に求められるような一義性･整合性が多少欠落していても朗詠の際の熱狂や忘却によってある程度補われ、問題とならないと考える。彼によれば、Hortforderung の言葉は見かけの申し出（Scheinangebot）に過ぎず、クリエムヒルトの言葉にもハゲネの言葉にも二義性（Doppelsinnigkeit）があり、二人は相手の発言の意味を自分に利するように解釈して言葉を返した。そして二人共それぞれの立場でそれぞれの勝利を得る。詩人は口承伝承の特性を利用し、一義性をあえて追究せずに精緻なあいまいさ（präzise Unschärfe）を残したのである。多義性はミスではなく、計算された幅であり、口承性は模倣された技法である。よって矛盾を抱えるとして争われている箇所の言葉もまた、一義的なものとしてではなく、多義的なものとして解釈すべきなのだ、と。

Müller の「二人の言葉の戦い」説は 30 年ほど前に Werner Schröder[31]が既に考えたものであった。彼はきめ細かく人物の心理や論理を検討し、クリエムヒルトはハゲネをディートリヒらの前で貶め自己正当化を目指したが、ハゲネはより策士 der bessere Rechner であり[32]、結局彼女の方が黄金欲ゆえに兄を殺害する者として貶められている、と結論づけた。Schröder が後の Müller と異なっていたのは、彼がテクスト内の論理に留まり、未だ詩人の意図や計算、あるいは口承と書記伝承の関係や構造の検討といったメタテキストな問題意識を持っていなかった事である。

筋に論理的整合性を与えて解釈可能とした Schröder に対し、Hans Kuhn[33]は、クリエムヒルトの復讐は宝の要求»Hortforderung«によって頓挫したのであり、筋は破綻しているという立場に立つ。そしてこのモチーフをあえて（削除あるいは何らかの改変を加えることなしに）採用してクリエムヒルトを大殺戮を引き起こす悪女に仕立て上げた点で写本 B ヴァージョンは崩壊している（fürchterlich）、と否定的な評価を示した[34]。だが何より Kuhn が研究史の上で転回を成したのは、彼が本場面に関して B・C ヴァージョンが異なる描写をし

[31] Schröder, Werner: Nibelungenlied-Studien,Stuttgart 1968. S. 156~180.
[32] ebd. S. 176.
[33] Kuhn, Hans: Der Teufel im Nibelungenlied, Zu Gunthers und Kriemhilds Tod, In: Rupp, Heinz (Hrsg.) Nibelungenlied und Kudrun, Darmstadt 1976. S. 333-366.
[34] ebd. S. 351.

ている事を指摘し、『哀歌』や写本 C ヴァージョンの研究の必要性を主張したことである。

Joachim Heinzle[35]もまた、本場面に置いて筋の一貫性は認められず、B ヴァージョンの解釈の可能性（Auslegungsraum）は非常に広いと考える。だがこの解釈可能性は近代文学のように詩人が意図的に作り置いたものではなく Löcher der Texte であり、欠落だと考察する。ただし、13 世紀の文学には一貫性や論理をそもそも求めるべきではなく、まただからといって論究を中止するのでもなく、写本 C や Klage にも目を向け広い視野を持って考察を進めるべきだと Heinzle は言う。そして写本 B ヴァージョンが既に同時代において道義的に疑問詞されていた可能性もある、と研究の新たな方向性を示唆した。

Bartsch/ de Boor による写本 B のテクストを中心的に扱う校訂版は、60 年代以降今日に至るまで底本とされている[36]。だが、今は複数のヴァージョンのテクストを参照する事、そして個々のテクスト上の問題の解釈を行うのと同時に作品の性格・構造に関する評価を定める事が求められている。

4. 写本 C ヴァージョンと写本 B ヴァージョンの関係

写本 A[37]B[38]C[39]のうちどれが『ニーベルンゲンの歌』のオリジナルに最も近い関係にあるか、という問題は、19 世紀を通して長く論じられた。そして 1900 年に Wilhelm Braune が写本 B ヴァージョンをオリジナルに最も近いものとする系統図の論を発表し[40]それがコンセンサスを得た後は、1960 年代まで、写本 B 以外の写本のテクストに鋭く研究の目が向けられることは殆どなかった。このようなテクスト観は Helmut Brackert が 1963 年に出版された博士論文において『ニーベルンゲンの歌』は一つの原初型を持つ "fest "な作品とみるべきでなく、伝承状況はもっと複雑だったと主張した[41]頃から大きく変化する。ある一つの決定的な権威を持つ原型から全てのヴァージョンが派生分岐し、写本 B のテクストがそのなかで最高の価値を持っているという認識は改められた。[42] ただし、（同じ素材を類似

[35] Heinzle, Joachim: Gnade für Hagen? Die epische Struktur des Nibelungenliedes und das Dilemma der Interpreten. In: Fritz Peter Knapp(Hrsg.), Nibelungenlied und Klage: Sage und Geschichte, Struktur und Gattung, Heidelberg 1987. S. 257-276.

[36] Heinzle, Joachim: Mißerfolg oder Vulgata? Zur Bedeutung der C-Version in der Überlieferung des "Nibelungenlieds". In: Chirca, Mark/ Heinzle, Joachim/ Young, Christpher (Hgg.): Blütezeit: Festschrift für L. Peter Johnson zum 70. Geburtstag. Tübingen 2000. S. 207-220. Hier: S. 207.

[37] ミュンヘン写本(1275~1300 年頃に成立)。Vgl. Hoffmann, Werner: Nibelungenlied (Sammlung Metzler) Hier: S. 69.

[38] Ebd.ザンクトガレン写本(13 世紀半ばから後半頃に成立)

[39] Ebd.ドナウエッシンゲン写本(13 世紀前半頃に成立)

[40] Braune, Willhelm: Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes. PBB 25 (1900), S. 1-222.

[41] Brackert, Helmut: Beiträge zur Handschriftenkritik des Nibelungenliedes. Berlin 1963. Hier: S. 160-173.

[42] Ehrismann (ebd.) S. 39-41.

の技巧によって整形しえた）多くの詩人によって様々な写本ヴァージョンが互いに関係し合わずに独立的に生まれたという論については当初から異論が挙がった。特に、ある一貫した構想のもとに詩節の追加や改変が行われた写本Cについては､創造的な一人の詩人（あるいはそうした者を取り巻く一つのグループ）の存在を想定すべきだと考えられた。[43] 現在大半の研究者は、ニーベルンゲン伝承はある書記化された原型において形をなしたが、それは発見されておらず､今参照出来るのはそこから二つに分かれていったB系統とC系統の写本である、という見解で一致している。そして、C系統の伝承は写本化されるよりかなり早い段階でB系統の伝承に改変（Bearbeitungen）を加えて成立したはずだ、と推測されている。

また､写本Bの持つ幅広い解釈の可能性に対して､写本Cは可能性を閉じ一つの方向に導こうとしている、という見方が多くの研究者に共有されている。また、写本Cは『哀歌』の諸ヴァージョンと共に、筋の矛盾の解決や韻律の精緻化が図られており、また宮廷的でキリスト教色が強く[44]、クリエムヒルトを免罪している､という評も共有されている。[45] 伝承状況を見れば､『ニーベルンゲンの歌』を伝える35の写本のうち､26はCヴァージョンに属するものかB・Cヴァージョンの複合体であり､13世紀のニーベルンゲン伝承においてCヴァージョンはBよりも優勢で大きな影響力を持っていたことが分かる。[46] またBヴァージョンが、同時期に並行して形作られていたCヴァージョンから逆に影響を受けた事も十分考えられる。

写本Cに存在するがBにない独自の詩節（追加詩節）や改変[47]事項の多くはクリエムヒ

---

[43] Schulze, Ursula: Das Nibelungenlied. (Reclam) Stuttgart 1997. S. 37-41.; Lienert, Elisabeth: Perspektiven der Deutung des Nibelungenliedes. In: Joachim Heinzle (Hrsg.), Die Nibelungen: Sage, Epos, Mythos, Wiesbaden 2003. S. 91-112.

[44] Knapp, Fritz Peter: Tragoedia und Planctus. Der Eintritt des Nibelungenliedes in die Welt der *litterati.* In: Nibelungenlied und Klage. Sage und Geschichte, Struktur und Gattung. Passauer Nibelungengespräche 1985. Knapp, Fritz Peter (Hrsg.) Heidelberg 1987. S.152-170. Hier: S. 166.

[45] Heinzle, Joachim/ Bumke, Joachim/ Müller, Jan-dirk/ Hoffmann, Werner など。

[46] Heinzle, Joachim: The Manuscripts of the Nibelungenlied, In: W. McConnell (Hrsg.): A Companion to the Nibelungenlied, Columbia 1998, S. 105-126.; Heinzle (ebd. 2000). S. 207-220. passim.

[47] そもそも写本制作は写本BよりCの方が先である。追加詩節、改変箇所と言われているのは、写本化される以前の段階でCヴァージョンはBヴァージョンに新しい情報の追加や矛盾の解決等の改変を加えたという意味からである。参考：ヴォルフラムの『パルチヴァール』のルーモルトへの言及の部分（420.27-30）が写本Cのテキストを想定している事から、Cヴァージョンの伝承は1204/5頃には既に存在していたと考えられる。Hoffmann, Werner: Nibelungenlied (Sammlung Metzler). Stuttgart 1982 (5.Aufl.). Hier: S. 80. そのような写本Bに無い素材を含むCヴァージョンの伝承は、推測するに写本Bの成立に先んじて存在していた（書記化されていた可能性もある）。Henkel, Nikolaus: Die Nibelungenklage und die C-Bearbeitung des Nibelungenliedes. In: Heinzle, Joachim/ Klein, Klaus/ Obhof, Ute (Hgg.): Die Nibelungen: Sage, Epos, Mythos. Wiesbaden 2003. S.113-133. Hier: S. 126.;また反対に、Bヴァージョンが、同時期に並行して形作られていたCヴァージョンから影響を受けた事も十分あり得る。

ルトとハゲネ像に関するものによって占められており[48]、人物の評価に一貫性を持たせるなど、作品の構成力を高める工夫がなされている。[49] 宝の要求» Hortforderung «とそれに関連する場面に関して、写本B・Cの相違点を考察する。

5. 写本B・Cのテクストの相違

5.1. クリエムヒルト像の改変

① »Hortforderung«—黄金欲からシーフリトへの»triuwe«へ—

写本B・Cの両ヴァージョンにおいて、クリエムヒルトはブルゴンド勢の到着後と最終場面の二度、宝の要求»Hortforderung«を行う。写本Cの詩人は、その一度目の場面の直後に以下の改変や詩節の追加を行う。そして彼女の目的が黄金ではなくシーフリト殺害に対する償いの要求であることが示される。

> C1783,4.[50]ニーベルンゲンの宝とその所有者の事を思って、私はずっと哀しい毎日を送ってきたのです。
> C1784[51]1.「私はあなたに何も持ってきてはおりません。」とハゲネは言った。2.「私は自分の楯などたくさん携えてきています。3.他にはこの胴鎧など。私の兜は光り輝いています。4.それにこの手にある剣は、あなたに差し上げるために持ってきたものではありません。」
> C1785[52]（追加詩節）1.私はさらに黄金を得たくてこう言っているのではありません。2.私には人に与えられるものがたくさんあり、あなたの贈り物はなくとも構わないのです。3.ひとつの殺害とふたつの強奪をあなたは私に対して行いました、4.その損害に関して私は償いを受けたいのです。

第3詩行目の「ひとつの殺害」、とはシーフリトの殺害である。そして「ふたつの強

[48] Millet, Victor: Germanische Heldendichtung im Mittelalter. Eine Einführung.Berlin 2008. Hier: S. 229.
[49] Henkel (ebd.) Hier: S. 125-129.
[50] C1783, 1. Dô sprach diu kuneginne: "ich hâns ouch gedâht. 2. ir habt mirs noch vil wênic her ze lande brâht, 3. swi er mîn eigen waere unde ich sîn wîlen pflac. 4. nach im und sime herren han ich vil manigen leiden tac.対応するB1743, 4. des hân ich alle zîte vil manigen trûrigen tac.
[51] C1784, 1. "Daz ist verlorn arbeit", sprach aber Hagene, 2. "wie mohte ich iu iht bringen? ich han vil ze tragene 3. an halsperge und an schilte an mime helme lieht. 4. diz swert an miner hende, des enbringe ich iu nieht." 対応するB1744とは小さな相違はいくつかある。
[52] C1785, 1. "Jâne rede ihz niht darumbe, deich mêre goldes welle gern. 2. ich hâns sô vil ze gebene, deich iuwer gâbe mac enbern. 3. ein mort und zwêne roube, die mir sint genomen, 4. des möhte ich vil arme noch ze liebem gelte komen."

奪」とは、ハゲネがかつてシーフリトを殺害した時に彼の剣バルムンクを奪った事と、後朝の贈り物としてシーフリトがクリエムヒルトに贈ったニーベルンゲンの黄金を奪った事を指している。

また、二度目の宝の要求（B2367、対応するのは C2426）の直前で、写本 C のクリエムヒルトはシーフリトのための復讐を念じている。宝それ自体は彼女の目的でなかった事が分かる。

C2425,4[53]クリエムヒルトは思った、「今日こそ私は、愛する夫の仇を討つのだ。」

以上のように、写本 C の詩人は、ニーベルンゲンの宝をかつての持ち主であったシーフリトの象徴として扱っている。クリエムヒルトは夫を殺したハゲネに宝の返還を要求する事を通して、彼を弾劾し、また自分の夫への愛»triuwe«と復讐の意志を表現している。

②クリエムヒルトの残忍性の緩和

クリエムヒルトは復讐のためブルゴンド勢をフンの国に呼び寄せる。写本 B ではその際、彼女の残忍さが強調され、悪魔に唆されて黄金のために大災厄を引き起こすクリエムヒルトをディートリヒは鬼女（vâlandinne B1748, C1789）と言った。写本 C の詩人は、彼女に対するそのような非難を軽減しようと試み、写本 B にあった「（B1394[54]）悪魔はクリエムヒルトに、彼女がキスを以てかつて和解したグンテルとの肉親の誠を破るよう唆した。」という一節は削除される。

さらに写本 C は、大殺戮に関する責任からもクリエムヒルトを免れさせる。彼女の当初の計画はハゲネ一人を殺害するものであったのに、それがブルゴンドの一族郎党の結合に阻まれたために戦いが激化してしまったと説明するのだ。写本 C ではこの種の免罪が追加詩節において三度[55]繰り返される。

C1882[56]（追加詩節）クリエムヒルトは兵を送り出す前に言った。「彼らに会ったら

---

[53] C2425, 4.si daht: "ich geriche hiute　mins vil lieben mannes lip."写本 B では B2366, 4 der Kriemhilde râche　wart an in beiden genuoc.　クリエムヒルトの復讐は二人に対して果たされた。

[54] B1394, 1. Ich waene der übel vâlant Kriemhilde daz geriet,　2. daz si sich mit friuntschefte von Gunthere schiet,　3. den si durch suone kuste in Burgonden lant.　4. do begonde ir aber salwen von heizen trehen ir gewant.

[55] 写本 B では、ハゲネ一人を復讐の対象とするクリエムヒルトの計画は、既に多くの兵が失われた戦いの後盤で一度だけ述べられていた。（B2104=C2161）

[56] C1882, 1. Ê Kriemhilt dise recken　hete dan gesant,　2. si sprach: "ob irs alsô vindet,　durch got sô sît gemant,　3. daz ir dâ slahet niemen　wan den einen man,　4. den ungetriuwen Hagenen:　die andern sult ir leben lân. "

不実なハゲネ以外の誰も殺してはならない事を神かけて思い出しなさい、他の者は生かしておくのです。」

C1947[57]（追加詩節）クリエムヒルトは言った「ハゲネは私にあまりのことを為したのです。彼は私の愛するシーフリトを殺しました。ハゲネを他の者から引き離した者には私の黄金を与えます。彼以外の者に復讐するとは私にとって心から嘆かわしい事です。」

C2143[58]（追加詩節）クリエムヒルトはこの大きな戦いを予期していなかった。彼女はハゲネの命をのみ奪いたかったのだ。だが悪しき悪魔が他の全ての者達にもそうなるようにしてしまったのだ。

写本 C の詩人はクリエムヒルトの夫への愛»triuwe«を強調し、彼女の目的は黄金ではなくハゲネに対する復讐であった事、また殺戮の拡大について彼女に責任はなかったという事を繰り返し述べる。

5.2. ハゲネと王兄弟の罪

①ハゲネ像の改変―主君に対する不実 untriuwe―

ハゲネは最後に「王兄弟との誓い」に言及し、宝の在処について口を噤む。写本 B のテクストにはハゲネから『アトリの歌』のグンナルのような英雄精神を読み取る肯定的な解釈の余地も残されている。だが写本 C の詩人は、»untriuwe«という言葉を導入する事によってハゲネの人物像を一気に谷に突き落としてみせる。

C2428[59]（追加詩節）ハゲネはクリエムヒルトが自分を生かしておかない事を知っていた。これ以上の不実»untriuwe«があるだろうか。彼はクリエムヒルトが自分を殺し、その後彼女の兄を国に帰してやる事を恐れたのだ。

この結果、ハゲネの言葉は主君の死を導くもの、あるいはクリエムヒルトを貶めようと謀る悪意の現れとしか解釈できないものとなった。

---

57 C1947, 1. Si sprach: "jâ hât mir Hagene also vil getân: 2. er morte Sîvriden, den mînen lieben man. 3. der in ûz den andern schiede, dem waer mîn golt bereit. 4. engultes ander iemen, daz waer mir inneclîchen leit."

58 C2143, 1. Sine het der grôzen slahte alsô niht gedâht. 2. si het ez in ir ahte vil gerne dar zuo brâht, 3. daz niwan Hagene aleine den lîp dâ hete lân. 4. dô geschuof der übel tiufel. deiz über si alle muose ergân.

59 C2428, 1. Er wiste wol diu maere, sine liez in niht genesen. 2. wie möhte ein untriuwe immer sterker wesen? 3. er vorhte, sô si hête im sînen lîp genomen, 4. daz si danne ir bruoder lieze heim ze lande komen.

②ブルゴンド勢の結束と王兄弟の罪

最後に主君グンテルを死に追いやる不実»untriuwe«なハゲネであるが、後編全体を振り返れば、彼がブルゴンド勢の最強の守り手である事実は写本Cにおいても全く後退していない。彼はむしろ写本Bに増して激しく味方を鼓舞し[60]、その闘志はすさまじい(C2137)。またハゲネと王兄弟との結合は、より強固なものとなる。例えば写本Bのハゲネはグンテルが未だ心を決められぬうちに計画を推し進めてシーフリト殺害を行うが、写本Cではそのようなハゲネの突出が緩和される。C913（追加詩節）でグンテルの主体的な殺害関与が示され、C923（追加詩節）ではBでは殺害に全く関与していなかったギーゼルヘルとゲールノートにもシーフリトへの警告を怠ったという罪が与えられている。

ただハゲネはこうした王兄弟との調和の内に留まる人物ではない。写本 C では、不実»ungetriuwe«なハゲネが王兄弟の不在中にニーベルンゲンの宝をラインに投げ入れた事についても、こうコメントが追加される。

> C1153[61]（追加詩節）彼（ハゲネ）はその宝を我が物に出来なかった、<u>悪人 ungetriwe</u>[62]の常のように。彼は自分の生きている間は宝を一人で利用するつもりだったが、後にそれは彼自身も、また他の誰も手に入れられなくなった。

この後、宮廷の者は皆ハゲネを非難し、帰館した王兄弟も怒って彼に対する恩顧を一時停止する（B1139。対応する C1155 も同じ）。写本Cではこの一節前で、王兄弟の怒りはクリエムヒルトの目を欺く偽物でる事が示される。

> C1154,4[63] 勇士達（王兄弟）はハゲネを非難しているかのように振る舞った。

写本Bではシーフリトを殺害する事も、宝の略奪と投棄も王兄弟の予期しないハゲネの裏切りであったのに対して、写本Cでは宝の略奪から投棄まで、全ての成り行きは王兄弟

---

[60] C2181（3/4 詩行がBと異なる）1. Dô sprach aber einer: "ich kiuse nu den tac. 2. sît daz ez uns bezzer wesen nine mac, 3.sô bereitet ir iuch, recken, ze strîte, deist uns nôt: 4.(wir komen doch nimmer hinnen), daz wir mit êren ligen tôt." 1.その時一人が言った「夜が明けてきたようだ。2.だが状況が我々にとって良くなる事はあり得ない、3.勇士達よ、戦いの準備をするがよい、4.（われわれは二度とここから出られないとなったら）、せめて誉れ高く死のう。」

[61] C1153, 1. Erne mohte des hordes sît gewinnen niht, 2. daz <u>den ungetriuwen</u> vil dicke noch geschiht. 3. er wânde in niezen eine, die wîl er möhte leben. 4. sît moht ers im selben noch ander niemen gegeben.

[62] シーフリト殺害に関する文脈ではハゲネの untriuwe が写本 B からすでに度々述べられているが(B876, 2･B915, 4･B915, 2･B1074, 1 など)、ブルゴンドの王に対する untriuwe が言われるは写本Cのこの二つの追加詩節(C1153, C2428)のみである。

[63] C1154, 4 dô gebârten die degene sam si im heten widerseit. 写本Bの対応する箇所は、B1138, 4 gerne waer' ir Gîselher aller triuwen bereit.ギーゼルヘルはクリエムヒルトに真心を捧げようとしていたのに。

が望んだものである。彼らは偽ってクリエムヒルトの保護者を演じ、ハゲネ一人に責任があるが如く批判しているのだ。彼らブルゴンドの一族郎党の結びつきは強力で、また王兄弟のシーフリトとクリエムヒルトに対する罪は明らかであるため、彼らが殺害されるのは当然である。

③ハゲネ像の描写に見られる「英雄」批判

黄金欲は写本 B においても一貫してハゲネの特性とされていた。シーフリトをヴォルムスの饗宴に招待した時、ハゲネはこう言う。「彼には施すことなど容易です。どんなに生きても使い尽くせないニーベルンゲンの宝を彼は国に持っているのです。ああこのブルゴンドで我々があれを所有できたらよいのに！[64]」またハゲネが、グンテルにクリエムヒルトとの和解を勧めたのも宝ゆえであった。[65] この人物特質は写本 C においてはさらに強調して描かれ、兄妹の和解の場面において彼の黄金への欲望はもう一度明確な表現で繰り返して言われる。[66]

またハゲネは二つの写本のテクストに共通して、ブルゴンド族を主導し守り手として活躍する戦士であった。ただその彼の行動原理は臆病の誹りを受ける事を恐れ、より大きな誉れ（や宝）を獲得しようとする事、即ち、英雄であろうとする事にあった[67]。写本 B と C のテクストは、この英雄性に対する評価のあり方において隔たりを見せている。ハゲネの言動に関する評価を定めない写本 B に対して、写本 C の宝の要求場面ではハゲネに対して主君を裏切る不実な»untriuwe«者、という厳しい批判の目が向けられている。ハゲネはその勇猛さや鋭敏な判断力を発揮してブルゴンド勢の先頭に立って戦い抜いてきた英雄であったが、真実のところは主君に対して忠誠の心»triuwe«を持っていなかった、と暴露されたのである。写本 C の詩人は、戦場における英雄（ハゲネ）の行いを賞賛せず、逆に共同体に対してその構成員が当然持っているべき誠»triuwe«を持っていない者として、根本

---

64 B774(=C780), 1."Er mac,"sprach dô Hagene, "von im sampfte geben. 2. er'n kundez niht verswenden, und solt er immer leben: 3. hort der Nibelunge beslozzen hât sîn lant. 4. hey, solden wir den teilen noch in Buregonden lant! "(C780, 1 "Er mac wol geben ringe,"sprach Hagene der degen,)

65 B1107, 1. Dô sprach der helt von Tronege: "möht ir daz tragen an, 2. daz ir iuwer swester ze vriunde möhtet hân, 3. sô koeme ze disen landen daz Nibelunges golt. 4. des möht ir vil gewinnen, würd' uns diu küneginne holt." (C1118, 1 Hagene sprache zem künige: "möchten..)トロネゲの勇士が言った「もし妹君と親愛の情を結ぼうとされるなら、この国にニーベルンゲンの黄金がやって来ます。我々は莫大な富をそこから得られます。もし王妃様が好意を抱いて下さるなら。」

66 C1127(改変)グンテルは彼女に礼儀正しく歩み寄った。宝のためにこうする事は決められた。宝のために不実な男は（ハゲネ）は和解を提案したのだ。2. Gunther gezogenliche gie gegen ir dar naher baz. 3. durch des hordes liebe was der rat getan; 4.dar umbe riet die suone der vil ungetriwe man. 対応する B1114 では、「ハゲネは彼女にキスをするのがよりふさわしかったのに。もし彼女がハゲネの唆しによって悲しみを味わっていなければ、ハゲネは堂々とクリエムヒルトの目の前に立てたのに。」

67 Haug, Walter: Höfische Identität und heroische Tradition im Nibelungenlied. In: Strukturen als Schlüssel zur Welt: kleine Schriften zur Erzählliteratur des Mittelalters. Tübingen 1989. S. 293-307. Hier: S. 299ff.

的にその価値を否定していると見てよいだろう。

写本 C の英雄性に対する批判は、ハゲネの描写以外の場面にも登場する。戦いを避ける事に全力を尽くすディートリヒや戦いを嘆くリュエデゲールに向けられた賞賛、その反対に、猪突猛進のヴォルフハルトや戦いに逸るイーリンクに対する低い評価などがある。

部族闘争と英雄の死を描く「破滅する異族間結婚物語」の型を何度も用いる『ニーベルンゲンの歌』だが、詩人達は英雄の行動原理からは距離を置き、型が要求している古いテーマを踏襲せず、これを換骨奪胎した。特に写本 C の詩人は、英雄ハゲネに黄金欲と主君に対する不実»untriuwe«を描き込む事で、より積極的に英雄性を否定した。そしてハゲネに対決させるようにして、新しく»triuwe«という価値の導入を試みたのである。

6. triuwe を軸とする写本 C の改変

triuwe という語の指す内容は幅広く、一つの作品においても文脈によって異なる内容を指す。この語は元々樹木や木材を表し、原義は「木のように堅固な」である。初めは「契約」や「契約すること」を意味し[68]、後に語義は拡大して、共同体における他者との様々な結びつきを支える概念となった。原義に最も近いものに、君臣の間の恩と忠がある。そして親の愛と子の孝心、結婚の愛、恋人の愛。人間・男・女性としてのあるべき姿など絶対的な価値概念としても使用される。騎士にとって、triuwe は謙虚 diemüete、節度 mâze、誉れ êre、清純 kiusche、たしなみ zuht などといった持つべき美徳[69]全ての源であり、それが失われれば他の全ての美徳も存在しえない[70]というほど包括的な概念であった。また古高ドイツ語時代からすでに人間の主従の契約を神と人間のそれに転化して、「信仰」「恩寵」の意味で用いられていたという。[71]

『ニーベルンゲンの歌』には»triuwe«の様々な姿が見られる。クリエムヒルトのシーフリトへの愛、ハゲネが破る家臣の主君への忠義、ブルゴンドの同胞の誠。そしてリュエデゲールにおいては、人が自己の内に持っているべき絶対的な倫理観あるいは神への信仰という»triuwe«が描かれる。辺境伯リュエデゲールは、クリエムヒルトに対してはエッツェ

---

68 Ehrismann, Otfrid: Ehre und Mut Âventiure und Minne. Höfische Wortgeschichten aus dem Mittelalter, München 1995. S. 211-216.; Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch. (10. überarbeitete und erweiterte Auflage.) 現在の英語：tree、現在のフランス語：trève とつながる。G.F.Benecke/ W.Mueller/ F.Zarncke: Mittelhochdeutsches Wörterbuch; M. Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch; Das Deutsche Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm.

69 ヨアヒム・ブムケ著、平尾浩三ら訳『中世の騎士文化』（白水社、1995）、61～420 頁。

70 Gentry, Francis G.: Triuwe and Vriunt in the Nibelungenlied. Amsterdam 1975. Hier: S. 17

71 以上 Paul, Hermann: Deutsches Wörterbuch.(10. überarbeitete und erweiterte Auflage.); G.F.Benecke(u.a.) ebd.; M. Lexer ebd.; Das Deutsche Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm を参照。

ルの求婚の使者として拝謁した際、彼女に害を為す者達には自分が報復する事を誓っていた。またブルゴンド勢に対しては自城で歓待し、王弟ギーゼルヘルと娘を婚約させ、また彼らをフンの宮廷まで道案内して友好関係を結んでいた。彼は昔の契約を守りブルゴンド勢と戦うことを迫るクリエムヒルトにこう訴える。

> B2150[72]（ほぼ=C2208）1.「誓った事は確かです、高貴な王妃よ 2.私はあなたのために名誉もこの身も投げ打つと言いました。3.しかし魂も投げ出すとは誓いませんでした。4. 私はこの饗宴へ生まれの良いあなたのご兄弟を案内したのです。」

誓い（によって生じた信頼»triuwe«の関係）を破棄する事は出来ない事について、リュエデゲールは写本Ｃではさらに言葉を尽くして述べ立て、最後は神に身を委ねる。彼にとって»triuwe«を破ることは魂を捨てる事であり、»triuwe«を守るためには国も財産も捨てようと言う。これはハゲネの黄金欲と主君に対する不実»untriuwe«と非常にヴィヴィッドな対照を成している。

> C2216（追加詩節）[73] 財を捨て（âne guot）私はこの国を去ります。妻も娘も連れていきます。誠を失って（âne triuwe）死ぬくらいなら。あなたの黄金など頂きたくはないのです。

法や国家の制度が確立されていなかった中世、人々は結婚や主従関係を幾重にも結ぶ事によって自分の身分や財産を守ろうとした。だが複数の集団と契約を結んだ結果、利害が衝突する二集団の板挟みとなる事態も生じた。契約の»triuwe«とは存在に懸けた信用と責任であったのだから、そのような場合、人々には非常に困難な決断が強いられていたと思われる。[74] だが現実には、契約関係が一方的に破棄される事は珍しくなかった[75]という。

現実世界の妥協と方便に満ちた»triuwe«の扱いに対し、『ニーベルンゲンの歌』のリュエデゲールは理想を追求した。彼の死は全ての徳の父[76]の死、と嘆かれる。

---

[72] C2208 (B2150) 1. " Daz ist âne lougen, ich swuor iu, edel wîp, 2. ich wolde durch iuch wâgen die êre und ouch den lîp: 3. daz ich die sêle vliese, des enhân ich niht gesworn. 4. jâ brâht ich her ze lande die iuwern brüeder wol geborn. "

[73] C2216, 1. Alles guotes âne sô rûm ich diu lant, 2. mîn wîp und mîne tohter nim ich an mîne hant. 3. ê daz ich âne triuwe belîben müese tôt: 4. ich het genomen übele iuwer golt alsô rôt."

[74] Müller, Jan-Dirk: Das Nibelungenlied (Klassiker-Lektüren; Bd. 5). Berlin 2002. S. 98ff.

[75] 主従関係から脱することで従軍の義務から逃れる（diffidatio）. Schulze (ebd.). S. 171-172.

[76] B2202(C2260).4.: vater aller tugende

7. 結語

『ニーベルンゲンの歌』は古い伝承から多くの素材を受け継いでいるが、その結合や重量配分のあり方は独自のものであり、またそこでは伝統的な物語の定型が複雑に組み合わせて用いられている。ただ、複数の伝承の結合体である事から、筋や人物造形には輪郭の曖昧な点がいくつもあり、詩人達は改変を重ねていく。

宝の要求»Hortforderung«は、読者の緊張を高め情動を揺り動かす劇的なモチーフであり、作品の最後に置かれるに相応しいものである。写本Bの詩人がこのモチーフを伝統的な物語の定型（破滅する異族間の結婚物語）が要求するままに置いたのに対し、写本Cの詩人は定型に沿って物語を進めながらもこれを手段として利用し、定型が持つ闘争の主題からは脱却する。そしてクリエムヒルトの言動の基軸にはシーフリトへの愛»triuwe«を置き、それに対してハゲネには黄金欲と主君を裏切る不実»untriuwe«という評価を下し、叙事詩を»triuwe«という価値観の周りを回る作品とする。また、宝の要求の背後にある黄金欲がクリエムヒルトとハゲネ双方の間を様々な意味や作用を持って漂っていた写本 B に対し、写本Cでは黄金欲はハゲネ一人に固定される。

クリエムヒルトの夫への愛»triuwe«が繰り返し賞賛される傍らで、ブルゴンドの集団の»triuwe«に対しては批判が強められていく。この集団の»triuwe«は暴力的な仕組みともなりうるもので、これを守るためにシーフリトは殺害される。またクリエムヒルトの要求通りにハゲネを差し出す事をブルゴンド勢が»triuwe«を守るために拒んだため、殺戮は拡大する。また反対に、ブルゴンド勢は集団の»triuwe«の中に潜むハゲネの不実»untriuwe«に気づきこれを排除する事が出来ず、彼の英雄的な活躍に依存していたために、没落したとも言える。写本Cのテクストは、集団の»triuwe«の脆さと危険を明らかにしている。»triuwe«という美徳の概念は多義的で、宮廷社会のさまざまな側面やレベルに根を下ろし、色々な局面で人々を縛るものであった。写本 C の描く世界において、共同体は時に»triuwe«のために、あるいは対立する»triuwe«の関係の板挟みとなって、大きな苦難を経験しなければならなかった。

宝の要求場面を写本B・Cを比較して考察することによって、文学作品のあり方が変容していくプロセスが確認された。詩人達は伝統的な素材や物語の定型を踏襲し、それを巧みに用いる。その際に問題が生じているときには人物像や筋に改変が重ねられ、また定型を離れて独自の主題が追究されたのである。

‚triuwe' im *Nibelungenlied*

Überlegungen zu den Unterschieden zwischen den Handschriften B und C bei Kriemhilds Hortforderungsszene

Aya MATSUBARA

In diesem Aufsatz wird eine Interpretation über die Wiedersprüche bei der Hortforderungsszene im *Nibelungenlied* (entstand zu Beginn des 13. Jahrhunderts) versucht. In dieser Szene sind die Handlungsmotivierung und Figurengestalten wiederspruchsvoll, weil da der von Kriemhild an Hagen ergangene Vorschlag der Begnadigung als Entgelt für die Gegengabe des Hortes zu ihrem bis dahin die Handlung leitenden Wunsch nach Rache an Hagen im Widerspruch stand. Viele frühere Untersuchungen zielten auf die Erörterung der psychologischen Beweggründe der beiden Figuren Krimhild und Hagen unter der Voraussetzung, dass die Handlungen und Figurengestalten im Text kohärent sein sollten. Dabei benutzte man vornehmlich den Text der Handschrift B, die damals als die dem Original am nächsten stehende galt und auf die man höchsten Wert legte. Dieser Standpunkt wurde aber mit der Zeit zunehmend kritisiert.

Für diesen Versuch sollten nun die Berücksichtigungen der Überlieferungsgeschichte des Epos noch mehr unentbehrlich, nämlich daß das Epos eigentlich aus zwei Stoffen (Brünhild-Sage und Sage vom Untergang der Burgonden) besteht und noch am Anfang des 13. Jahrhunderts auf dem Weg der Verwandlung stand, und daß es sich nach dem Gebrauch der literarischen Werke des Hochmittelalters an bestimmter Erzählsschemata orientierte. Meine Interpretation geht zuerst in der Auseinandersetzung mit der Erzählschemata von der ‚Brautwerbung'. Im Anschluß daran überlege ich die Unterschied zwischen den Handschriften B und C besonders in der Beachtung auf das Konzept der 'triuwe'.

Für diese Brautwerbungsschemata gibt es hauptsächlich drei Typen. 1) Die einfache Brautwerbung wie „König Rother", deren Regel „Bester Mann und schönste Frau" war. 2) Die Brautwerbung mit einem Werbungshelfer wie im Tristanroman. 3) Nachgeschichte der Brautwerbung, nämlich, die Geschichte der gescheiterten Exogamie wie im „Atlilied", die von der verräterischen Einladung und Schlacht zwischen den zwei Sippen erzählt. Legt man diese drei Typen zugrunde, kann man den Verlauf des ganzen Epos folgendermassen charakterisieren. Typ 1): Brautwerbungen des Sivrites nach Kriemhild. Dann Typ 2): Brautwerbung des Gunthers nach Brünhild mit einem Werbungshelfer, Sivrit. Aber diese Heirat, die nur mit der Hilfe des stärksten Mannes Sivrit erfüllt werden konnte, beruhte auf einem Bruch der Regel für die Brautwerbung, und beinhaltete eine gefährliche Verbiegung. Diese Verbiegung wurde mit Hilfe der Logik des Typs 3)

aufgelöst: Die Burgonden töteten den stärksten Mann Sivrit, um die Ehre ihres König und ihrer Königin zu bewahren. Da ihre auf das Brautwerbungsschema recht basierende Liebesgeschichte und Ehre grundlos zerstört worden war, wünschte Kriemhild ihre Rache am Mörder ihres ehemaligen Mannes Sivrit, dem sie ihre ‚triuwe' auf lebenslang gewidmet hatte, leisten. Das solide Motiv ‚triuwe' wurde aufgrund dieser Zusammenfügung von den Brautwerbungsschemata neu entstanden.

In der Handschrift B, scheint diese Einführung der neuen Handlungsinitiative ‚triuwe' endlich aber in der Hortforderungsszene, wo das Thema des traditionellen Brautwerbungsschemas (Typ 3: über die tragische Sippenschlacht) symbolisch erscheinen sollte, verzichtet worden zu sein. Dagegen hat der Bearbeiter des Textes der Handschrift C diese neue Handlungsinitiative durchgeführt und dafür das traditionelle Erzählschema nur wie ein Gefäß benutzt. Er zeigte seine Teilnahme am Leid der klagenden ‚triuwen' Kriemhild, und äußerte Kritik an Hagen, dessen ‚untriuwe' zu seinem Herren Gunther in der Hortforderungsszene enthüllt wurde, und auch an die kämpferische Solidarität (‚triuwe') von den Burgonden, die für die Ausweitung der Schlacht verantwortlich war.

Hinter den Bearbeitungen in der Handschrift C kann man eine neue literarische Tendenz erkennen, daß die Texte bei dem Übergang von der mündlichen zur schriftlichen Überlieferung nun der Folgerichtigkeit der Figuren und der Handlung bedürfen. Das Epos wollte sich aus der einfachen Anwendung der alten Erzählschemata allmählich befreien. Ein neues Thema wurde dabei mit dem Auftritt des vieldeutigen Begriffs ‚triuwe' gesucht. , triuwe' war die zentrale Gewähr für die Würden der Menschen in damaliger höfischer Gesellschaft. Dieser Begriff fungierte in den Bearbeitungen ausschlaggebend als Bewertungsmaßstab: treue Kriemhild und untreuer Hagen. Aber machte es zugleich die verworrene mehrschichtige Weltanschauung des Epos noch lebhafter. Es gab dem Schicksal des Heldentums und auch dem Problem der gegenwärtigen höfischen Verhaltung konkrete Umrisse.